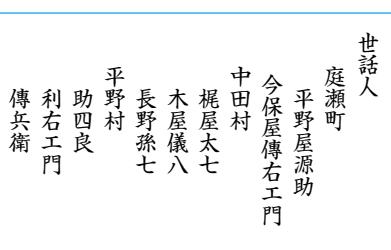




5 釣鐘・題目石(正法寺)

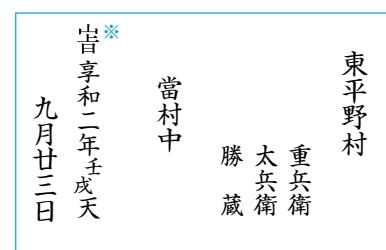
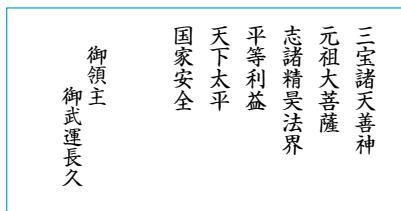
正法寺(西花尻261)



(3)



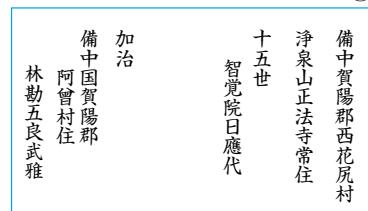
(2)



(4)



(5)



西花尻の半鐘

この半鐘は僧房内の連絡合図用に作られたものである。平成21(2009)年11月、西花尻の火の見櫓に吊るされていたものを撤去し、正法寺へ移設保存した。

本来は正法寺の備品だったが、太平洋戦争の金属供出を免れる為、防災用として火の見櫓に吊るしたと言われている。

铸造の地、阿曾村(総社市)には、1800年代に铸造物の工房があり、有能な技能者集団がいて、昭和初期まで存在した。

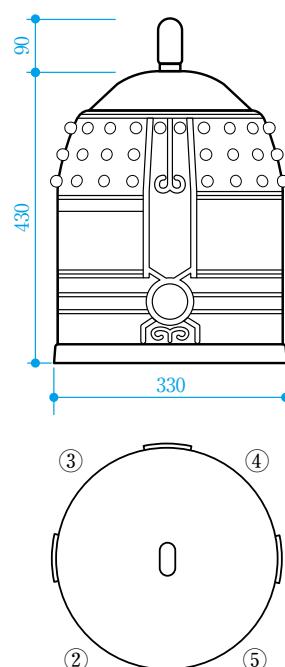
梵鐘は、仏教の法要における予鈴に使われていたが、やがて朝夕の時報(暁鐘、昏鐘)に撞き鳴らされるようになった。太平洋戦争の時に、ほぼ九割が铸造された。

鐘は大きさによって呼称が異なる。

・梵鐘:口径1尺8寸以上

・半鐘:それ以下

・喚鐘:口径1尺以下





正法寺と藤原大納言成親の歴史

嘉応2年(1170) 成親の知行地美濃で目代、領民を打ち殺しの暴動^{*}。成親は解官されるも流罪回避。

*美濃の国知行地:岐阜県大垣市の北、安八郡神戸(ごうど)町一帯延暦寺領莊園として、日吉山王を勧請した日吉神社があり、古くは小比叡と称せられた。目代正友が日枝神社の信徒と争いを起こし、十数名を打ち殺した。その責任を取り、正(政)友投獄、成親流罪の裁定がなされた。

承安年代 国司成親は備中へ流罪決定。正林坊、法住坊、月心坊を設営。

「備前へ流すべし」の騒動(延暦寺・反上皇派)

成親、正二位に叙す。

安元年代 権中納言に昇進

安元3年(1177) 6月鹿ヶ谷の陰謀により再度流罪、8月成親刑死。

↑

この間およそ450年、この地奥谷の人々は正林坊、法住坊、月心坊の三か所の坊の維持管理と成親公の慰靈を全住民で行っていた。
③ 題目石(月心坊跡)参照

↓

元和元年(1615) 正法寺の造営。不变院の智円坊日泉上人が三つの坊を統合して正法寺を造営。大納言成親を弔い、外には帝釈天庚申天を祭祀した。

㉗ 帝釈天を参照

門前縁起板

此の門は武家門と称され。
正二位藤原大納言成親公菩提の為。普光明院
殿五男天童院是を建つと屋根瓦に記さる。
嘉永五年九月二十三代寂音院日広代修復すと
瓦師棟梁記す昭和三十九年三月再度大島日鳳
に依り修復せり。庭西奥には千六百年前頃の(仁
徳天皇の頃)石棺の蓋保存せり
古考学的資料なり



門前縁起看板

庚申山 浄泉山正法寺 縁起

平清盛全盛の1177年(平安時代)、一部上級公家達は、後白河上皇と氣脈を通じ京都東山の鹿ヶ谷の別荘で平家討伐の計画をたてたが間もなく発覚する。

この事件の中心人物の一人、正二位藤原大納言成親は、一門20数名と共に庚申山のふもとの三つの庵室(坊)に流され監視下におかれた。

三所の坊は、正林坊・法住坊・月心坊(奥谷)といい、成親が信仰していた帝釈天庚申信仰の場となって、広く村人も受け入れ永承と引き継がれていった。

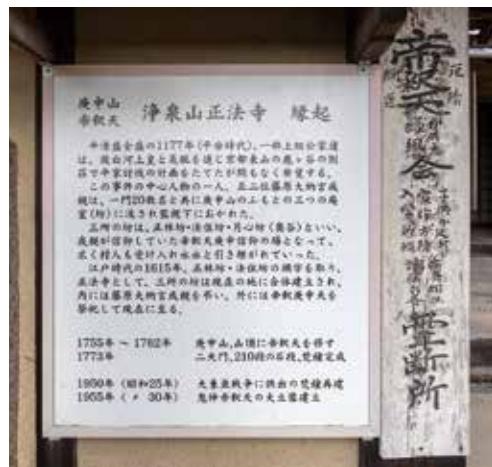
江戸時代の1615年、正林坊・法住坊・月心坊の頭字を取り、正法寺として、三所の坊は現在の地に合体建立され、内には藤原大納言成親を弔い、外には帝釈天庚申天を祭祀して現在に至る。

1755年～1762年 庚申山、山頂に帝釈天を移す

1773年 二天門、210段の石段、梵鐘完成

1950年(昭和25年) 大東亜戦争に供出の梵鐘再建

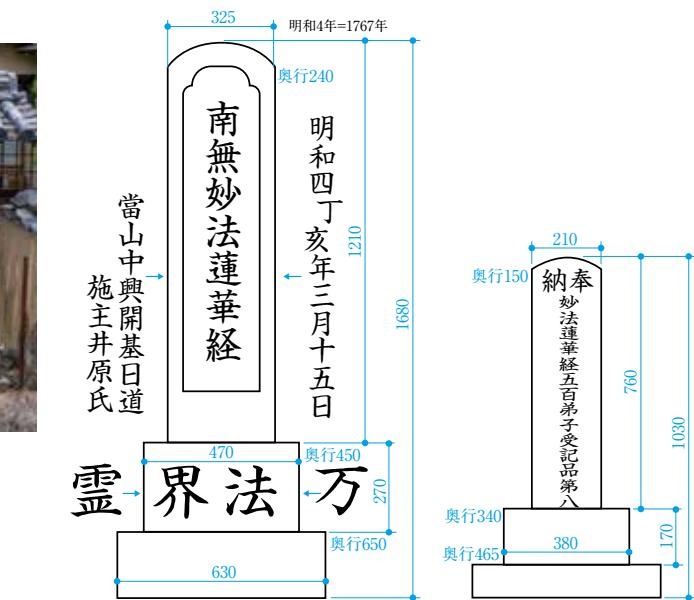
1955年(昭和30年) 鬼神帝釈天の大立像建立



門前の題目石



境内の題目石

石棺蓋
幅840×高さ800×奥行170